
神の力の箱ですか。

紅 もみじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の力の箱ですか。

【Nコード】

N0142X

【作者名】

紅 もみじ

【あらすじ】

両親の死によりこの世に絶望していた瀬川辰巳は、高校の帰り道にいきなり不審な男に連れ去られ、見知らぬ土地へ。話を聞くと彼の中には神の力があるらしい。もう戻れないことを伝えられた彼は、この世界に馴染むために学校に通うことに。*同姓愛の認められた世界での王道学園&国に護衛されるドタバタライフ。*辰巳君は無自覚イケメンです。*他CPもいます。

プロローグ？

さあ、この状況を誰か俺に分かるように端的に説明してくれ。

どこだかわからない、日本とも思えない、暗い神殿。神を彷彿とさせる石像や装飾の数々。ステンドグラスの嵌め込まれた崩れかけの石壁からは、多色な光以外にも疎らな光が差し込んでいる。

俺の記憶では、いまは辺りも暗くなる時刻の筈なのだが、この理解不能地域には通じない様だ。本当に誰か説明してほしい。

俺が鉄製の鳥かごに入れられて、美形軍団から見つめられるはめになった理由を。

今日も快晴。

9月上旬の残暑の色濃く残る季節。雲ひとつ許さずに晴れ渡った空に、俺はためにためた空気を吐き出した。

現在、時刻は午後の3時を少し回った。部活のない者は帰路に着く。俺もその一人な訳で、本屋に寄って帰るつもりだ。家に長居するのはいまの俺の心理状況的に厳しい物がある。とりあえず、そうして家に帰って、何だか寂しくなった我が家にご対面する。そう言ういつもと変わらない一日を、無意味に終えるはずだった。

そう、筈だった。

本屋に出来るだけ居座った帰り道。外は完全に闇が降りていて、駅までの道のりを街灯頼りに歩いていた。

これも最近となつてはいつものこと。両親との思いでのつまつたあの家には、もう俺の居場所はない。

1ヶ月経つただろうか。俺にとっての唯一気の置けない存在、母と父が交通事故でこの世を去つたのは、はつきりいつて自爆だった。目撃者の証言によると、飛び出してきた野良猫を避けようとし

て脇に停車していた軽油トラックに激突。大破、炎上しニュースにもなった。

最後までお人好しだ。猫のために命をなくしたのだから。「人には優しく他人に厳しく」を実現できる人たちだった。俺は自分の親として、誇りに思う。

両親そろって腐っていたのが玉にきずだが。そのおかげで無駄な知識が入ってしまった。

否、断言するが俺は腐ってない。断言する。無駄に知識があるだけだ。家にふつうに転がっている物だから。小さい頃はそれが何なのか分かってなかったしな。分かってからは見なくなった。

両親の他界後、俺たちの家には、今まで祖母と同居していたおばさん夫婦が、俺の面倒を見ると言う建前で引っ越してきた。しかしその実は、それなりに裕福だった家の資産を、義理の親としてもらい受けること。彼らの瞳に俺は写っていない。その欲に汚れた瞳に映るのは、お金ばかりだ。

だから、俺には居場所がない。

自分でもうつになるんじゃないかと思うことを考えながら、一つ、角を左に曲がった。徐々に細くなっていく道に街灯は申し訳程度にしかなく、人通りも皆無だ。

あと角を二つ曲がって、駅から電車に乗ってしまえばすぐに家についてしまう。あんなに早く帰りたかった頃が、幻想であったような気さえする。

俺は見えてきた角を今度は右に曲がった。

「お前か、辰巳ってのは」

「え？——っ!？」

突然の背後からの声に両手を捕まれ、壁にうつ伏せに叩きつけられた。とつさのことで反応が遅れてしまったが、一応仕返しとして近づいて来た気配のあった後頭部後ろにあるだろっ頭に向かって、頭突きをお見舞いする。ガスッと鈍い音がして、男のうめく声が聞こえた。

それでもつかんでいる腕は緩めることはない。俺は舌打ちをした。めつきり勝負を挑んでくるやつがいなくなったと思っていいたら、随分強いやつが来たじゃないか。

「なにすんだよ、いてえじゃねえか」

たいしてダメージを食らっていないくせに、一丁前に文句をいつてきたその男は、俺の手を押さえつけているのとは反対の手で頭を押さえしてきた。

「——っ」

冷たい壁がじかに頬を冷やす。

なんだよこいつは。流石にこんな体育系っぽい体格の男じゃ、力で勝てない。真っ暗で顔も見えないから過去にやったことがあるのかないのかわからないし。あつたとしてもいまの状況が変わるわけではないけど。

「ん？へー綺麗な顔してんじゃん。あーでもちやつちやと帰んねえとまずいか…惜しいなー」

人の顔を覗き込んで、ぶつぶつとけつたいなことをいつている男はあまり強面ではないようだった。あまりに近すぎて、押さえつけられる痛みに耐えながらも顔の判別ができた。

見たことはない。確信できる。なんせ男の髪の色はマリモのように濃い緑だ。痛みも忘れて吹くところだった。

ただそれは男の方に引つ張られたことによって阻止された。これはチャンスだ。動かされたことで拘束の解けた足で、体を捻って回し蹴りを叩き込む。両手と頭を押さえられていてもこれくらいはできる。ちよつと腕が変に曲がつた気はしなくてもないけど。

「うおつと」

男は後ろに飛んで避ける。いい反射だ。残念。

すべての拘束が解けたことで、俺はそのまま一目散に逃げた。真剣にやれば勝てないことはないかも知れないが、意味がない。それに危険な橋は極力わたらないことにしている。叩くもの面倒だ。

「あ、おい！」

後方でどなる低い声に、おってきていないことを察知する。よかった。俺は安心して、少し早さを緩めてしまった、それが命取りだった。

「逃げんなよ」

「!？」

今度こそ、俺は男の腕の中にいた。いつの間に追いついたのか。全く気づけなかった。

「ほんととは使うのよくないんだよ、魔法はよお」

は？なんだって大の男からそんなファンタジーな言葉を聞かなくやならないんだ。

もう意味がわからない。

「なんだよっ、離せ！」

「煩いなあ、黙ってる」

その言葉のあとに、首の後ろに鈍い痛みを感じて、俺の意識は遠のいた。

プロローグ？（後書き）

初めまして。

ノリで書いてしまっている作者です（笑

誤字脱字等ありましたら、お知らせください。

プロローグ？

ここで話は冒頭に戻る。

目を開けて、最初に映ったものは鉄格子だった。

現在俺は固いゴムのようなもので両腕を縛られた状態で、小さめの鳥かごに閉じ込められると言う羞恥プレイをさせられている。何がどうなったのか。

始めにもいったが、誰か説明してくれ。

見たところ、神殿っぽいこの場所は体育館ほどの広さがある。本当に神殿なら、大広間とか講堂じゃないだろうか。

この俺の分析はRPGの知識を総動員した結果だ。伊達に高二でゲームオタ化してないよ。

あ、それで思い出した。俺の大切なゲーム機が入ったバッグ。…よかった、ちゃんと肩にかかっている。

ふつとなにげなしに正面を向く。誰かいらないのか。

ステンドグラスの光が柔らかく、タイル張りの床に降り注ぐ。と、光と影のコントラストの合間に、誰かの足が見えた。

視線をそのまま上へと移動させる。そこには、飾りつきの中折れ

帽を目深に被った、軍服姿の男が立っていた。表情は読み取れない。

「こいつが『神力箱』じんりょくばこか？」

右側からの重い声に、反射的にそちらをみる。

きつと鋭い目で睨み付ける、きつめの女性と目があつた。美青年過ぎて男かと思つたが…胸あるもんな。

って何見てんだ俺は、こんな時に。

「まあ！美しい方じゃあないですか！」

今度は左側から妙にテンションの高い女性の声。素直（？）に顔を向けた。

ゴスロリと称されるフリルがたくさんあるワンピースを着ている、

ピンクの長髪美少女だ。

美しいってあなたのことじゃないですか。

いつの間にか鳥かごの周囲には何人かが等間隔に並んでいた。俺を取り囲むかのように。

さすがに怖いんだけど。

後ろの见えない俺から三人がしっかりと見えるわけだから、他に3、4人は居るのだろうか。

「始める前に、ちょっといいかな」

正面にいた帽子の男が、チョイと唾を押し上げていった。コツコツと靴をならして近づいてくる。

唾を押し上げたことにより、よく見えるようになった顔は、他にみたことがないくらい美しい。細い切れ目とくねった紫の髪が、それ以上無いほどの色気を醸し出していた。

「その格好、そそるね」

「!？」

格子越しに目とはなの先にあつた美麗な男の顔に、驚いて身を引いた。帽子の彼はフツと妖艶に笑う。

俺は直視できなくて視線をそらした。

美形過ぎて気まずいのもあるが、大部分は真面目な恐怖からだ。

自由にならないこの状態で、知らない、しかもちょっと危ない気がするこんな集団に囲まれたら、だれでも恐怖くらい持つ。

「儀式が終わったら、私のもとにおいておくのもいいかも知りませんね」

「ーっ」

伸ばされた手が首筋に触れた。

そのまま手は顎へと移動していく。遂には、クイと顎をあげられ、強制的に目をあわせられた。親指はなぜか唇の辺りを撫でていて、はつきりいつて気持ち悪い。

背筋に嫌な汗が流れるのを感じた。

「怯えてるのかい？可愛いね」

男はまた妖艶に笑う。どうもこいつらは変態のようだ。： また俺は関係の無いことを。

「まあいい。儀式が先だ」

男は今まで撫でていた指先を急に止め、爪を立てて首筋を一撫でした。

「——っ!？」

変な声が出そうになるのを必死に押さえる。そんな優しく爪を立てないでくれ。

男はくるりと向きを変えて、輪へと位置をもどし、

「始めよう」

変わらぬ笑みで放った。

プロローグ？（後書き）

ちょっと短めです。

帽子男が変態気味だと思いながら書いてました（笑

誤字脱字等ありましたらお知らせください。

ブローグ？

さあ、この状況を誰か俺に分かるように端的に説明してくれ。

なんか聞いたことあるような気がするセリフだろうが今はそんなことどうだっていい。

なぜ人が増える。

帽子の男が笑顔で云い放った次の瞬間、ステンドグラスが砕けた。続いて壁の砕かれる音がする。

俺を取り囲んでいた美形たちはすぐさま周囲を見渡した。

やがてちょうどおれの正面の位置（帽子男に重なって見えない）を全員で見据える。

俺は少しでも見えるように体をそらした。

砕けたステンドグラスの散る中で、立っていたのはまたしても美形だった。

深い緑色のがっちりした服（軍服だろうか）に身を包んでいる、茶髪の好青年。異国風の装飾の施された剣を持っている。その後ろ、同じような格好をした人が十名前後。その中に一人髪の長い女性がいた。一人だけ、薄い緑の方の違う軍服を着ている。やはりきれいな人であった。

「意外に早かったね、予想外だよ」

帽子の男は横顔をこちらに向けて流し眼を言った。

美形なんだからそんなことしたら……ずるいよな。うらやましいよ。その子をこちらに渡してもらおうか」

「断るよ」

「素直に聞くとは思っていない」

「なら聞かないでよ」

うわ、冷戦だ。見えないけど火花が散ってる。絶対。

「これじゃ儀式できねえじゃねえか。どうすんだ？」

俺の後方、つまり籠の後ろから声がした。これは…俺を連れてきたマリモの声。

「今回はあきらめるしかないね。ああは言っただけど儀式に必要不可欠なものだけを持って撤退しよう。彼はまた取り返すさ」

そう言っただけで男はまた俺に流し目を送る。さっと目をそらした。

さっきから儀式儀式って、いったい何なんだ。状況的に、絶対に俺に関係あるよね？何、生贄？だったら俺不幸の極みだと思う。

「ひどいなあ」

すぐ近くから聞こえた男の声に、ぱつと顔を上げる。目の前に妖艶にはほ笑んだ美形さんがいてわずかに身を引いた。男の肩越しに見えた正面では、RPGのような大乱闘が始まっていた。皆剣や短剣を持って戦っている。鉄砲はいないのか。そのかわり、ところどころでなにか紋様が光っていた。魔法だろうか。マリモも言っただけだ。

「わっ」

いきなり男に肩を掴まれた。驚いて目を見開く。

「ちょっと我慢してね」

男は俺に見せつけるように群青色の大きな鍵をかざすと、それを見せつけ俺の胸につきたてた。

「なっ！？」

男は変わらず妖艶に笑う。

妙な感じだった。俺の体にとつぷりとつかる鍵の先端が見える。

それなのにまったく痛みを感じない。水面に棒きれをつっこんだ状態に似ている。俺の体はそれを受け入れているかのような。気持ち悪い。

男がにわかに鍵を回し出す。

なんだ？熱い。

男が鍵を回していくにつれて俺の体に熱がたまる。沸々とどこからともなく湧き上がるそれは、今までに感じたことがない熱量だった。

た。熱くて、苦しい。

「は——っ」

「あと少し」

燃えるように熱い。

ちようど鍵のあるあたりから、湧き上がる熱は力の様で、俺の体に充満していく。

力子

なにかのはまる音がした。

「またね。お姫様」

頭にくる言葉を最後に、俺は意識を手放した。

ブログ？（後書き）

今回も短めです。

じゃないとストックが…

プロローグ？

夢を見た。

最近だ。そう、両親が逝ってしまつてすぐの頃。俺がひどく落ち込んで、鬱になっている頃。何度も見た。今も。

夢は変な夢だった。

俺は自分が生まれる前の幸せそうな両親を上から見つめているのだ。母がとても優しい目をして自らのお腹を撫でる。父もまた穏やかな視線でそれを見つめる。

俺の願望の世界。

こうであつてほしかった、続いてほしかった世界。

夢は決まつてこれで終わる。幸せを噛み締めて終わってしまう。ただ、今回は別だった。

「もういないものを追い求めるのか。意味はないだろう？」

声は思念しかない俺に語りかけてきた。

姿はない。ましてや声で判断出来ない。ただ連なる音のようだ。

「未練か？」

無言を通した。それで伝わると思った。

「他に大切なものは？」

「ない」

俺の即答に、声は憐れみを乗せて続ける。

「なら、別にこの世界に未練はないんだな」

世界。口の中で反復して、確める。

大きなものが来たな。でも、

「無い、な」

俺にとって世界なんて、もうどこも同じだ。あの夫婦から逃げ出

せるなら、冥土にだっていつてやる。

「じゃあ、いいよな」

何が、とは聞かなかった。何となくわかったから。

俺はあまり考えなかった。必要がなかった。

「いいよ」

視界が開けた。

フツと意識が浮上する。開けた視界の先は見慣れぬ天井、否、様々な装飾の施された薄いカーテンが波打っている、これは…？

俺は起き上がると周囲を確認する。

何処か、西洋貴族のベッドルームを思わせる。透き通るような青を基調とした清楚な部屋。

その中でも特段目立つだろうキングサイズのベッドに俺は寝かされていたようだ。

ベッドはお姫様が寝ていそうな、ヒラヒラのレースの施されたもの。水色と白のグラデーションは涼しさを感じさせてくれる。

あれ、そういえば少し体がほてっている気がする。寝ていたからだろうか。

俺はこの短時間で起きた様々なことを振り返ってみることにした。まず、帰り道にマリモに拉致られて、意識飛ばして目覚めたら、鳥籠ん中から美形軍団を見上げる状況に。あれはホントに羞恥プレイだった。それに恐ろしかった。…まだ恐怖が残ってる。

思い出してしまったことで恐怖がよみがえる。俺は両手で小刻みに震える肩を抱いた。

今のこの場所だって、俺は知らない。何も知らないんだ。キィ、と音がした。

俺は反射的に扉のあつた方に顔を向けた。右手前にある両開きの扉はかすかに開かれていた。と、開いた空白からあの時の、好青年が顔を出した。

彼は、俺を見て柔らかく微笑むと、此方へと歩み寄ってきた。

「お目覚めでしたか。急で申し訳ありませんが、陛下がお会いしたいと仰っております」

「え…？」

陛下。陛下っていうのはやはり一国を治める王様のことだろうか。だとしたら、ここはお城か。

言葉が通じる時点で此処は地球のどこかではないのだろうか。

日本には天皇はいるが、陛下と呼ばれる人物はいないはずだ。

つまり。族に言うあれだ。

異世界トリップ。

だからさっきの声は、きっとこれの予兆。俺に戻らなくてもいいかの確認。

でも、大体の異世界トリップってものは戻るもんなんじゃないのか？元の世界に戻るための方法を探る。それが主だった目的になるんじゃないだろうか。

「辰巳様？」

「は、はいっ！」

考え込んでしまっていた俺の目の前に、いつの間にか好青年の不安げな顔が。俺は驚いて後ろにのけぞりながら慌てて返事をした。

「参りましょう」

「・・・はい」

俺は言われるがまま、ベッドから降りて好青年の後に続いた。

まあ、どうせ陛下とやらが説明してくれるだろう。なんか知っていそうだし。

プロローグ？（後書き）

辰巳君は察しがいいです。

あと理解。

ばっさりしてるから。

ブログ？（前書き）

わわっ！

なんと6件もお気に入り登録が！

もう、なんて言うか

ありがとうございます！

こんな素人の文を読んでもくださって！！

活動報告もやってるんでよかった（殴

……本文どうぞっ

ブローグ？

案内されたのは一際繊細な装飾の施された両開きの大扉の前だった。これまで続いていた、ベージュとくすんだオレンジの壁に茶色の扉と言う組み合わせではなく、赤と金色の豪勢な扉。変わらない壁に挟まれて少し浮いてしまっている。

なるほど、ここに陛下がいるのか。やけに派手な訳だ。

好青年がコンコンとドアをノックする。すると示し合わせたかのように内側から扉が開いた。ギイイとあまりよろしくない音を立てて開いた扉の向こうは、またしても赤い。正確には白い大理石の様な床の上にレッドカーペットが敷いてあり、赤い壁の合間に黄色い円柱型の柱が立っているのだ。

失礼しますと一礼して歩を進めた好青年に倣って、一礼し後を追う。

…正面にいるあのイケメンさんは例の陛下だろうか。最上段にある金色の椅子に腰かけて、こちらを見て微笑んでいる。さっきの帽子男とは違うタイプで美しい人だ。帽子男を大人の色気のある美形とするなら、彼はさわやかな空気を醸し出す若々しい美形さんだ。

ああ、嫌な奴を引き合いに出してしまった。

気を紛らわそうと少し周りを観察してみる。

兵士とかでたくさん人がいるかと思っただが、そうでもないようだ。陛下だろう人物の横にはこれまた超絶に綺麗な女性がいる。奥さんだろうか。綺麗な金髪はカールしてクルクル巻かれていて（用語なんて俺は知らない）、目が行っちゃって困るぐらいグラマラスな体型をしてらっしゃる。男の目にはよろしくない。

そして反対側には、陛下ほどではないがジャニーズに入れるだろうイケメンがいる。まだ幼い顔つきに見えるから、多分俺とそう年齢は変わらないだろう。それから、壇の上ではない俺達と同じ高さ

のところ、さっき見た長髪の女性がいる。しなやかに垂れ下る青みがかった黒い髪は、腰に届きそうだ。彼女も遠目では分からなかったがきつめの美人。…そのきつい目でこちらをあまり見つめないでほしいが。

「お待たせいたしました、陛下。こちらが例の瀬川辰巳です」

あれ、俺名乗った覚えないんだけど。

「御苦労。瀬川辰巳だな。こちらの都合で気苦労をかけてすまない。今の状況はどのくらい呑み込めている？」

「あ…えっと、ここが俺の知らないところって言うことぐらいで…」
急に笑顔が向けられて混乱してしまう。もしかして俺って美形に弱いのかな。俺男なんだけど、別に憧れはおかしくないよな？

「そうか、うん、そうだな。まだ何も説明していないからな。ではこれから私の口から説明しようと思う。長くなるから場所を変えよう。立ったままではきついだろう」

陛下はそういうと立ち上がり、後ろの二人を引き連れて壇を下り、俺の横をすぎて扉へと向かってしまった。行動が早いというか急と言うか。軽く礼をして後に続いた好青年に続いて俺も後を追った。

通されたのはこれまた大きな部屋だった。さっきのドーム型の講堂の様な所とは違い立方体の様な空間。そこにぼつんと大きな長机が置かれている。もちろん純白のテーブルクロスつき。

「無礼講だ。皆こちらに座れ」

陛下が長机を縦に一望できる席に腰を下ろすと俺をその斜め手前に促した。俺の隣にまた一礼して好青年が着き、その隣に同じく一礼して長髪の女性が着いた。俺と好青年の向かえ側にはそれぞれグラマラスな美女とイケメンが座る。

「まず、わたしはこのセプテリア王国の王、ヴァランだ。ヴァラン・ファリスアーナという。まあ、ヴァランと呼べ」

「セプテリア王国…ヴァラン、陛下、ですね」

たぶん、これから覚えなくてはいけないことだと思っから、反復

して頭にインプットした。自慢じゃないが暗記は結構得意なんだ。そうしているとヴァラン陛下に苦笑いで返された。

「陛下などつけなくともよいのだが、まあ周りの者はそう呼ぶからな。そしてこれらがわたしの妻だ」

そう言つて陛下が指示したのは迎えに座っている二人。

ん？二人？確かにこれらつて言っただけど、妻とも言ったよな？片方イケメン君ですよ。

「第一妻のメリッサと第二妻のゼンだ。…どうした、固まつて？」

拝啓、母さん父さん。もしかすると俺の今いる世界はあなた達がいよいよ愛する物が可能な世界かもしれません。

「…少し、驚いただけです。…俺のいた国では妻は一人だけでしたし、同性婚も認められていませんでした。ましては王もいませんでした。…それらのある国もありましたが、俺は国を出たことはなかったのです」

ヴァラン陛下から目を離さずに言った。俺の話に逆に驚かれてしまったようだ。陛下はわずかに目を見開いている。周りからも同じような気配を感じる。

異国、なんだと改めて思った。まさか自分がこんな“非”現実的な体験をしようとは。

そういえば元の世界で、俺は神隠し的な扱いをされるんだろうか。

「…それは、まあ、世界が違えばいろいろだからな。…この国、いや世界だな、では恋愛事はいたって自由だ。性別など関係はないついでに複数の妻を持つことが許されているのは王である私だけだ。これから過ごしてもらうに当たってその辺の常識も必要になって来るだろうな。そのあたりは置いておくことにしよう。ひとまず現状確認だ」

思考が完全に反れていた。危ない危ない。

ってか俺話ずらしちゃってるじゃん。いや、でもしょうがなくないい？まじめに驚いたし。

「辰巳、お前の中には『神力箱』と呼ばれる力の塊がある。神の力の箱と書くのだが、その名の通り神の力を納めたものだ。これはあくまで世界神話の話だが、『創造神がこの世界を創造した際に神は世界の安定を見守り保つために“はざま”へと身を置いた。』：“はざま”というのは不安定でわたしたちの世界の中枢となっている場所を指すのだが、私達はそれがどこにあるのかさえ掴んではない。だが、それに関する古い文献や、それに近い場所などは発見されていて、調査も行われている。：『神は力を使わなくとも時を経るごとに湧き上がってくる。そうなるといつしか満杯になってしまうときがある。そうなると世界のバランスが崩れてしまう。それに危機を感じた神が己の力を注ぎこんだ力の塊を、別世界へと飛ばしてしまおうと考えた。飛ばされた力はその世界の何らかの生物に取り込まれ、稀に異能を発揮するという。』：わたしたちは別世界へなど行くすべを持たないからこの神話を確認したことはないが、この現代まで信じられてきた。実際こうして辰巳がここにいるのだから実在するのだろう。世界を渡ったのだから。なにか、自分に不思議な能力があると思ったことはないか？」

ヴァラン陛下は一度そこで切ると俺の目を見据えた。

正直、あった。でも、気のせいだと思っていた。普通そう思うだろう？

俺は頷いた。

ヴァラン陛下も頷いてくれた。

「問題はここからだ。実在するという事実をどうやってか突き止めたやつら…辰巳をこの世界に連れてきたあいつらだ。『黒蝶の騎士』なんて名乗っているがこれまでにいくつかの聖地を荒らしている如何わしい奴らだ。何が目的かは知らんが力を欲しているらしい。そこで『一神力箱　じんりよくばこ』に目をつけたのだろう…何か、されなかったか？」

何か？

瞬間、俺の内に熱がともる。熱い。覚えのある感覚に、背筋が冷

える。

無意識にワイシャツの胸元をわしずみにした。

内から湧き上がる熱と力を強制的に抑え込んで、ギュツと力を込める。

「どうした？」

「なんでもないです。あの、鍵って分かりますか？」

「鍵？」

ヴァラン陛下はあごに手をあてて考えている風な仕草をすると、ハツとして俺に視線を戻した。

わざとらしく見えるけど…素っばいな。

「もしかして、辰巳自身にさしたのか？」

「はい」

「まわしたのか」

「と言うか回されました」

部屋に重い空気が流れ始める。俺、まずいこと言ったかな？いや、言ったよね。絶対よくない代物だよね、あれ。

「…平気か？」

「へ？」

「体だ。それは辰巳の中に眠っていた力を開放する鍵だろう。彼らが神話の中だけのその鍵を手に入れたと聞いた」

心鬱な表情で言うヴァラン陛下に、隠し事はしてはいけないような気がした。

「…熱い、です。何かが内から湧き上がって来るようで。・・・でも、どうにか抑え込んでるんで、大丈夫です」

そういうと、ヴァラン陛下は目をいっぱいに広げる。ほんとに変なこと言っただろうか。

「抑え込んでいるん、ですか？」

そう言ったのは俺の横に座っていた好青年。彼もまた驚きに目を見張っているようだった。

ほんとに俺変なこと言ったかな。

「・・・なんとか」

「初めから力の制御が出来るのか。すごいな。こちらが手ほどきをする必要がなくて助かる。…では最後に、これからのことについて話そう」

今一度仕切りなおしたヴァラン陛下に向き直り、真剣に聞く体制になる。

「もう君は帰れない」

潔く告げられた真実に、わずかに顔がこわばる。でも、分かっていたと言えば分っていたことだ。

俺は、それを受け入れたのだから。

「やつらは辰巳を狙ってくるだろう。ここで匿ってもいいんだが、それではこれからこの世界で生活していく君にはとても不便だろう。それにわたし達としても君の存在は公にはしたくない。幸い奴らはここしばらくは手を出してこないはずだ。儀式をするための装置を、君を奪還した時に少し壊せたからな。準備にはそこそこかるはずだ。そこで、辰巳には一般的な学校に通ってもらおうと思っただ。学校等の制度は元の世界ではあったか？学ば場所なんだが」

「はい。俺も高等学校に通っていました」

「よかった。不思議なものだ。それから、一般的な常識や、基礎能力の向上、および身の回りの世話のために彼をつける。まあ、家庭教師兼護衛と思ってくれ。…私達王族との繋がりには極秘で頼むよ」
そう言っヴァラン陛下は俺の隣の好青年を指し示す。彼はさわやかすまいる全開で目のあった俺に笑いかけた。

うわーイケメンがそんなことしたら女の子いちころだろうな。

「よろしく願います。辰巳様」

「あ、こちらこそ。よろしく願います」

俺が慌てて頭を下げると、彼はまたもや微笑んだ。

プロローグ？—終—（前書き）

お久しぶりです（^^；

やっと一話に入れます。

プロローグ？―終―

あのあと少し学校について聞きながら好青年——センサス・イズクスさんと、これから二人で住むことになる場所へと移動した。彼によると、俺の通う学校は基本的な制度は変わらないが、細かなところは違いが多い。まずは一週間（七日）の内六日間学校だということ。曜日感覚は同じだが休みは日曜だけらしい。その代わりか、45分授業で毎日五校時。これは嬉しい。こうなると部活の無いものは（部活という概念も同じ）2時15分には帰れる。部活も最高で5時までで、元の世界と比べると2時間近く早く帰れる。……まあ俺は部活してなかったけど。それでも早く帰れることは好ましい。どうやらこの世界では日が短いらしい。午前6時に昇った日登った日は、午後4時には完全に沈んでしまう。

科目は元の世界にもあった国語、数学、理科（生物と物理）、社会、体育の他に魔法実技、魔法工学があり、外国語と魔法倫理の選択、家庭科と保健の選択がある。

うう……気がめいる。内容が同じだったらしいのに。魔法なんて分かんないぞ。

どうやら彼はその学校の卒業生らしく、いろいろ話を聞いているうちに目的地へと到着した。なるべく一般的で、なおかつ不自由しない場所と言うことで、これから通う学校近くの高層集合住宅マンションの一室を与えられた。内装はいたって普通で、備えられている家具も元の世界となんら変わらない。違うところと言えば、電気やガスなのが無く、全て魔法でまかなわれているということだろうか。なんでも、電化製品ならぬ魔動装置と言うらしく、中はメカニカルな部品が埋め尽くされているのではなく、複雑な魔法陣と式とが張り巡らされているのだそうだ。メカニカルな部分が全くないわけではないが。

さつき聞いた学校の説明の捕捉で、なんとセプテリア王国唯一の男子校らしい。まあ、この世界はその辺の区分をしてもあんまり意味は無いらしいが。元の世界で言うホモの割合は半端なく多いことが予想されるな。男も女の関係無いんだろうけど。なぜかヴァラン陛下から気をつけろと言われたけど、俺社交性ないし、大人しくしてればこんな奴目立たないよね。

あと彼は、学力も平均的で、特に特質したところもない学校だと言っていた。学力方面は一から学ばなくてはならないことを考えると落ちこぼれそうだけど。仕方ないと思う。うん。め入っても仕方がない！

「辰巳様？」

「へ？あ、はい！」

振りかえっていたら考え込んでいたようだ。

そしてセンサスさん？なぜそんなに近くにいるんだい。びつくりして仰け反っちゃったじゃないか。

「他に必要なものなどありませんか？」

「大丈夫です。こんなに服も与えてもらっちゃって…十分すぎるくらいです。ありがとうございます」

「いえいえ。お客様ですから。敬語も使わなくていいですよ？」

「いや、それは無理ですよ！年上の、しかも一国の騎士様に！」

そう。なぜ彼が俺を助けてくれて、しかも世話まで焼いてくれていいのか。気になった俺は尋ねた。直球にね。

その答えが、一国の騎士様だということ。この国では“騎士”と呼ばれるのはほんの一握りの剣士で、その中でも『王宮騎士』というのは、陛下の側近の様なもので身の回りの世話も焼くらしい。それで世話にも慣れていて、尚且つ強いセンサスさんが俺の世話係に抜擢されたらしい。因みに名前は有名だけど顔は見せていないので、偽名を使えばれないそうだな。

「それは困りましたね…。これから俺たちは一応“兄弟”って言うことになってますから」

一番シンプルだからね。そうだった。でも、なら余計にセンスさんが俺に敬語って…。

「兄が弟に敬語使うのもおかしいと思います」

「そとでは使わないようにしますよ」

「…だったら、お互いに敬語なしにしませんか？おあいこでしょう？」

「ですが・・・」

「違和感があってかありません。俺も敬語使わない方がいいんでしょう？」

俺はセンスさんが言い終わる前に言った。

こういうとき俺って譲らないんだよね。

「・・・わかりました」

「・・・」

「わかった。辰巳」

俺はにつこり笑った。優しいな、センス。

「ありがと。俺は偽名の方で呼んだ方がいいの？」

「そうだね。その方がいいと思う」

「了解。…えっと、どうするの？」

「セカンドネームは辰巳のを使おう。うーん、そうだな・・・イズでいいよ。俺のセカンドネーム」

「イズ・瀬川になるの？…ははっ、芸人見たい」

「笑うのかよ！！」

堪え切れずに大声で笑い出した俺に慌てたようにつつこんできたイズは、なんだか気取ってない気がして、嬉しくなった。これから長い付き合いになるんだから、素でいいこうな。

1 転入ですか。(前書き)

やっと一話目です。プロローグ長かった…

そしてなんと、お気に入り登録が二桁に!!

へへへへへへ*

ありがとうございます!

がんばっておいしい展開を目指します!!
↑

1 転入ですか？

あれから一週間ほどたった。時期が微妙（ちょうど長期休暇にあ
たったらしい）だったため、休みが明けるまで転入はお預けで、そ
れまでイーズにさまざまなことを教わった。

まず一安心したのは勉強で落ちこぼれる心配が軽くなったとい
うことか。

イーズに教わったのももちろんだが、なぜだか元の世界と似通っ
ているのも理由の一つだ。数学なんて、この魔法の世界で何に使う
のかと思うが、こちらの高等学校で中学二年生程度の物を教えてい
る。だから、する必要はない。分かるから。これでも俺結構成績良
かったし。第一高二だし。受験は乗り越えているのさ！

因みにこの世界には受験は無いらしい。高校まで義務教育で、大
学は高校から特定の大学に入ることが出来るようになっていて。自
己申請らしいが、拒否されることはあり得ないそうだ。大体一つの
高校に3〜4校の大学が帰属していて、高校を選ぶときに大学もほ
とんど決めてしまう。すごいことだ。俺なんか高二にもなつて、ま
だ進路迷ってたんだから。…もう関係ないか。学力はその学校のテ
ストの平均と余所の学校のテストの平均の比較だ。

…元に戻るが、あとは国語。絶望的だと思っていたのに、なぜか
日本語。これはホントに驚いた。まったく同じなのだ。皆の名前が
カタカナなのは単純に文化の違いらしい。文法とか漢字とか現代文
とか古文とか漢文とか、なんら変わらない。あと理科もおなじ。生
物の名前とかが違うのがあるだけ。

そして二つあった選択教科は、家庭科と外国語を選んだ。料理と
か裁縫とかは得意じゃないけど苦手じゃないし。嫌いじゃないんだ
よね。そして、外国語は、まさかのまさかで英語でした！どうやら
日本とアメリカの立場が逆転した感じなんだよね。世界の共通語が

セプテリア語（俺からしたら日本語）で次に使っている国が多いのがアナリア語（英語）。だから選択で選べたらしい。そしてやっぱりレベル的に中学校。楽な方を選んだのさ。

そうなる歴史や国の仕組みに関する社会と、魔法系の授業だけが問題となる。

この一週間で中学生レベルに届くかどうかあたりまでやったが、まだまだ危ない。赤点とりそうだ。

魔法に至っては初体験。子供でも出来るという魔法を一からやっているから、実技の授業をどうやってごまかそうか、今から画策している。

まあ、その場合はサバればいかとも思っているけど。成績良かったけどまじめじゃないから、俺。

そんなこんなで勉強ばっかしてたような気がする一週間を終えて、本日、始業式と同時に俺の異世界生活本格始動なわけです。

家が近いため見慣れぬ道を地図を頼りに歩く。

あまり近くない生徒は『空間移動^{テレポート}』を使って学校付近までやって来る。学校内部まで入るのは校則違反なんだそうだ。

『空間移動^{テレポート}』は媒体を使って行う魔法だ。この世界の魔法は二種類ある。媒体に式を組み込んで行う“媒体魔法”と素手と頭の中の式だけで行う“素体魔法”。前者は基本的に高度な魔法を使う場合が多く、後者は実用的なものが多い。『空間移動^{テレポート}』も例外に無く高度なもの。どうやら結構な魔力を消耗するらしい。だから、媒体に魔力をためてそれを使うのが一般的だそうだ。

俺もその媒体を渡された。青い水晶みたいなプレスレットだ。この特殊な水晶の中に魔力をためるらしい。俺のにはイーズが念のためと言って緊急用の通信機能と発信機がついている。ほら、一応俺守られてる立場だから。

そうこう考えているうちに地図にある曲がり角に。石やレンガ造りの家や商店らしき建物を横目に見ながら、既に気

の置けない仲のイーズに出がけに言われた言葉をふと思い出す。

『あんまし目立つな……って行っても無理だろうから、まあ、気を付けるよ。色んな意味で』

…意味が分からない。意味がわからなすぎて頭に引っかかってしまった。……三ポイントリーダーの数だけ勝ってみる。

目立たないの無理って、俺はあんたみたいにイケメンじゃないんだよイーズさん？

うわ、落ち込むわ。

一人鬱になりかけていると前方にはそれらしい建物が。ブロック塀に囲まれた高い校舎と針葉樹を見上げていると、人の声が聞こえて右側を向いた。数人の生徒が塀に吸い込まれていく。あそこが校門か。

しかし、今遠目から見た生徒達。顔よろしくていらっしゃる方が多かったんだけど。

俺、隅っこで小さくなってよ。

1 転入ですか。？（前書き）

ちよつと長め？
かもしれません。

活動報告の方で辰巳君が頑張ってますんでそちらもよろしく^^

1 転入ですか？

そつなく終わった始業式の後、案内された教室は2―Cと書いてあった。簡単に挨拶した俺を生徒が凝視する。

なんでみんなこっち見るのってそりやそうだね。転校生だもんでもなんでにやにやしてたり目をまん丸にしたりするのかな？そんなに俺は浮きますか。まあなんか皆さま美形ですものね。

でもちよつと安心したのが、平凡さんや体育系さんもいるということだった。

ホームルームが終わると同時に人にたかられた。いるよねこういうやつら。俺は転校したこと無かったけど、やって来た奴にたかっているのは見たことがある。どこも一緒だ。窓側の一番後ろだったんだけど、広がった後ろの空間に、もはや逃げ場はない。俺は質問攻めに答えるはめになった。

…疲れた。

まさか初日にこんなに疲れるとは思わなかった。質問攻めは1, 2校時目くらいで終わったけど、なんか視線とか。意味分かんない。そんなに異物か？

質問だって答えたというか、あんまし答えられる質問もなかったし。

『どこから来たの？』の回答は準備してきたけど、『どんな所』って聞かれると、イーズからの伝聞を頼るしかないし。一般的なものになってしまった。他の質問だって二言三言答えて、無視した質問も多い。

なんだか初めっから社交性の無さが全開だ。…ぐすん。

現在昼休み。イーズお手製のお弁当を持って、さっさと教室を抜け出したところだ。なんか視線が怖かったから。

食堂がどこにあるかなんてまだ分かんないから（そういえば案内されてない）とりあえず上に向かう。屋上くらいあるだろう。

案の定適当に階段を上っていたら半開きの鉄製の扉があった。

ラッキー。ここで食お。いつも一人で食ってたしね。…寂しい奴。扉を押すとギイイと耳につく音を立てて、空いた隙間から生ぬるい風が吹きこんできた。

そして、固まった。

「・・・」

「なんだよ」

まさかだ、まさかだよ。

先客だ。

いや、まあ誰もいない保証なんて無かったけど。いつもは誰もいないから、あ、異世界でした。

俺は反射的に扉を閉めようとして

「ここで食うんじゃねえのか？」

止めた。

「や、邪魔になって・・・」

「こんなただっ広いところで邪魔も何もねえだろ」

ちょうど正面のフェンスにもたれかかってパンを食べているのは、どう見ても体育系の比較的がっしりした男だった。やっぱりそれなりの美形。群青色の短髪が似合ってたらしいや。普通にいすぎて。

ジャニーズがあつたら仕事にならないだろうな。普通にいすぎて。

「じゃあ・・・」

他に行くあてもないので彼の言葉に甘える事にする。

どこに座るか迷って、彼の２メートルほど横に座った。

彼はそんな俺の様子をうかがいながら、またパンを取りだす。ビニール袋いっぱいじゃなか。てか見るな、俺を見るな。

「おめえ、うちのクラスの転校生だよな？」

「へ？クラス一緒？」

「ああ、てか一応お前の隣の席」

うそお！？疲れすぎて気にしてもいなかった。あれ、俺ってかなり失礼な奴じゃない？

「いや、別に覚えてなくってもいいんだけどさ。あんだけ囲まれてりや隣も見えねえからな」

「は、はい・・・すいません」

優しい人じゃないか。俺はほつと胸をなでおろす。

「おい。もっとこっち来いよ。ちよつと話そうぜ」

「へ？あ、うん」

とんとんと彼は隣をたたいて俺を導く。こういうの初めてだからなんか構えちゃうな。あんまり周りの人と積極的に関わらなかったし。

「おめえ、名前は？俺物覚えわりいんだ」

「瀬川辰巳、あ、辰巳がファーストネームね」

「タツミか、珍しい名前だな。俺はナザ・スインスってんだ」

「よろしく、ナザ」

「おう」

それからいろんな話をした。とりとめもない話だったけど、お互い気があつて。

…俺が質問して、回答を聞いていることが多かったけど。

だってほら、俺あんま話せること無いんだよね。この一週間、勉強漬けになってただけだし。

「辰巳の弁当ってうまそうだな。母さんうまいんだろ、料理」

「いや、これはイ…兄貴が作ってんだ。俺ら2人暮らしたから」

「そうなんか。すごいな兄貴。いくつよ？」

「21だったかな」

「わけえな。魔高大学とかいかねえのか？」

「働いてるからね」

なんでイースの話に……。俺あんま知らねえんだけど。

「へーどこだよ？」

「ど、どこだったかなあ？忘れちゃった」

これ言ったら終わるでしょ。ごまかすにしてもそんな職業が一般的なのかとか知らないし！

「自分の兄貴だろ？まあいいけど。あ、やべ。そろそろ五限目だ」

「えっ」

「行くぞ」

そう言って手招きしてくれたナザに、俺はなんだかあつたかい気持ちでついて行った。

友達、出来たね。

1 転入ですか。？（前書き）

やっとタグの意味が出てきました^^

1 転入ですか？

教室に戻るとちょうど昼休み終了の鐘が鳴った。授業開始まではあと五分ある。

「あ、ナザが転校生と帰ってきた」

「え！？わお、どうしたのー！ユーはあんましそういう大胆なことしないと思ってたぞっ？」

「なんだ大胆って。ただ飯食ってて話しあったんだよ」

「ユー、飯食ってんのって屋上じゃーん？あそこって一応入っちゃいけないよねー？」

俺が気にせずに自分の席に着き、なんとなくナザ達を眺めていたら、目があった。

目の痛いオレンジ色の髪を肩まで伸ばしたいかにもチャラチャラした感じの彼は、色っぽさを含むたれ目を細める。

「いや、どうしたらいいのさ。これって、目、逸らしたら負け？列二個分離れてるから普通に話して届かないし。転校初日に大声張り上げる勇気なんざ存在しないし。入っちゃいけないとか知らないし。」

そうやってずっと目をそらさないでいたら、彼の隣にいてナザと話していたもう一人の少年までもが俺に視線を向けてきた。…あれ、ここ男子校だよな？なんであんな可愛い子いるの？薄紫の瞳と切りそろえられた同色の髪は、変に跳ねる事無く肩近くまで下りている。見るからに小柄な彼は女の子と言ってもいいような整った幼い顔をしていた。

そして品定めをするかの様に俺から目を離さない。

ヤバイ、もうそらしたい。先生こないかな。

冷汗だらだらで踏ん張っていると、がらりとドアを開ける音がして、止め方の分からない勝負から解放された。

五限目の終わった放課後。先ほど下らない勝負をした（と思っ
ているのは俺だけ）2人がナザと共に、帰り支度をしていた俺の元に
やって来た。

「はじめまして。タツミくん。僕はアセラ・ノートランっていいま
す。アセラでいいから」

そう言って笑いかけてくれたのは、やっぱり小柄だった薄紫の髪
の子。…まつ毛長い。ほんとに男か？

「みーはレント・アラヴムってんだー。よろしくねー。タツミン」
俺って観察能力高いのかな？チャラ男でした。

レントはなぜかアセラの肩を抱いて、俺と同じくらいだろう身長
を縮めている。

「・・・よろしく」

「おらー構えちまつたじゃねえか。絶対レントのせいだな」

2人の隣で聞いていたナザが髪をくしゃくしゃとかきながら言う。

「えーひどーい。ミーいつもどーりじゃーん」

「ちゃらい」

「えーアセラらんまでー！みーさすがにアセラらの言葉は刺さるよー
？」

「よし、もつと言え。アセラ」

「ナザっちがいじめるー！」

「ちよつとなんで抱きつくの。一応僕もナザ側なんだけど」

「わーん！俺の見方はタツみんだけだあー」

「え・・・」

完全に立ち入れない世界に、傍観を決め込んでいると、いきなり
振られて無意識に声が漏れた。俺別に味方になった覚えないんだけ
ど。ってか参加してないです。

完全に困ってしまったっている俺をよそに、まだギャーギャー騒ぎ始
めて、さっきの流れからか、見方ー！と言ってレントが抱きついて
きた。・・・もうなるようになれ。

「おかあさーん。怖いおにーちゃんがいじめるー！！」

「・・・そんな子に育てた覚えはありません」

適した対処法が思い浮かばなかったので、よくあるセリフを言ってみる。このセリフはこっちの世界でも通用するんだろうか。ってか話つながってないよね。

「みーも育てられた覚えありません」

フツーに返された。

「・・・そろそろ離れたら？」

「なんでー？」

「なんでって・・・」

…アセラの背後に阿修羅が見えるのは俺だけだろうか。どうしたんだ。何がそんなに気に食わない。そしてレントは素直に離れる。

「僕を怒らせたいの？僕以外に抱きつくなくて言ってるじゃん」

背筋の冷えるような音をその小さな唇から紡いだアセラはちょっとだけ頬を赤く染めて、すぐに言ったことを後悔するようにうつむいてしまった。

なんか、可愛いなこの子。小動物的なかわいさだ。和む。

「・・・へへっ、アセラ、可愛い」

「なっ」

ヘラリと笑って俺が考えてたのと同じようなことを口走ったレントは、俺からするりと離れてアセラの目の前で屈んだ。

ちよっと気になってただけけど、この二人ってもしかして…。

「悪かった。アセラ焼くかなーって思ってたさ」

「…嵌めたの？」

「やっぱり可愛かったー。まあ、一番の理由は俺とのラブラブぶり見せつけて、転校生君が変な気起こさないようにすることだったんだけど…どう？おっけー？」

おっけーって・・・まあ、どんな変な気が知らないが、俺の思う通りなら大丈夫だ。

「おっけー」

とりあえずこう返事しておく。無難だろ？

やっぱりこの世界って同性愛出来ちゃうんだよね。しばらくそう
言ったこと関係無かったから、意識が薄れてた。俺があんまし抵抗
感ないのは、残念な知識と両親のせいだと思う。こんなところまで
小さな親切(?)残していくとは。

1 転入ですか？（前書き）

短めです。

1 転入ですか？

「なあ、辰巳はなんかこのあと用事とかあるか？部活とか、見た方がいいだろ」

ナザは体育会系特有のちよつと暑苦しいスマイルを俺に向けた。

「何故だろう、親の血が騒いでいるような気がする。俺は腐つてないからな！ただ読んだことがあつたやつのキャラを思い出しただけだ！」

「気持ち嬉しいけど……俺このあと生徒会の人に学校案内してもらうんだ」

五時間目終了後に担任に言われた言葉を思い出しながらいった。

なんかハゲのおっさんだったな……。担任。

「へー、生徒会直々なんだあー。まあ、たつみんならランキング上位に食い込みそうだもんねー」

「ランキング？」

かわらず軽い調子のレントは、アセラの肩口に腕を後ろから巻き付けている。それをアセラも受け入れていて、普通なら、ここで仲いいなあ、何て思うんだろうけど、カミングアウトされているわけだから、いちやついているようにしか見えない。

ところで、反射で聞き返したけど、ランキングって……まさか、ねえ？

「しらないー？結構こーいう制度のがつこーあると思うよー？」

「俺田舎から来たからさ」

「ふーん。ランキングはねー二つあるんだー——」

レントの間延びしたしゃべり方で聞いた説明を、簡潔にまとめるとうこうだ。

この学校の生徒会及び執行部は、『抱きたいランキング』と『抱かれないランキング』の上位者によって構成され、上位者は強制的

に何らかの役職を与えられる。因みに張り出されるのはそれぞれ15位まで。もちろんその全員に役職は与えられる。そして投票は年に三回、長期休暇後に行われる。投票するかは自由で、持ち票は一人最大5票。

なぜそういう仕組みなのかと言うと、親衛隊の制度が生徒会執行部にしかないんだそうだ。親衛隊を作って統括しておかないと、何をやらかすか分からないらしい。与えられる役職はその人個人の能力で決めるそうだ。

っていうかね？

やっぱりだね。もしかしてこっつて王道学園だったりするんじゃないかな！？

あ、俺が知ってるのは両親の影響だから。何度も言うけど腐男子じゃないよ？その証拠に王道学園来ても喜んでないからね。だって俺には関係ない世界でしょ。あの二次現的な出来事は、かつこよくないと起こらないのさ。いや、別に俺に起こらなくていいんだけどね。面倒事は嫌いだし。受け流したい人だし。

： なんだけど、確か説明する前に、レントは俺がランキングに食い込むとかなんとか、言ってなかったか。あり得ないだろ。そして全力で遠慮する。

何が悲しくて男と…や、まあ、この世界では恋愛に関して区別はないんだろうけど、俺もたいして抵抗ないけれども。区別がなくなるともノンケは普通にいるし、陛下だって妻（♀）いたし。

うん。俺はノーマルでいたいな。

「じゃ、俺部活あるから」

「僕もそろそろいかないと」

「じゃあみーもー。たつみんじゃーねー」

ナザがぼそりと呟いたのを皮切りにそれぞれ用事を思い出したらしく、俺も簡単に挨拶をして見送った。

何て言うか、明るい人たちだな。ちょっとビックリしたけど。明日も話せるかな。

心なしかワクワクしながら、いつの間にやら誰もいなかった教室を見渡す。俺たちが最後だったみたいだ。

さて、この部屋に迎えに来てくれると聞いていたが、ずっと待っていればいいのだろうか。どうも、申し訳ない気がするが、内部構造を知らない俺が出歩いたところで、余計な手間にしかならないだろう。ならば、堂々と待っていることにしよう、俺は魔法工学の教科書をカバンから取り出した。

1 転入ですか。？（後書き）

活動報告で小話をしています^^

1 転入ですか。(前書き)

微、背後注意です。

R15タグを使用します↑

だいたい。

1 転入ですか？

「タツミ・セガワくん？よかったあーまだ居てくれたね」

日が落ちて、部活も大体終わってしまっている頃になってようやく声がかけられた。俺は不満の色を乗せて真横一直線上のドアを向いた。ナザ達と別れてから有に一時間は経っている。

「そんな顔しないで？悪かったから・・・じゃあこっちきて」

特に目立つた要素もない顔の男がへらへらと笑いながら手招きをした。

生徒会はランキング上位者と言っていたが、こいつが上位に入っているとはあまり思えないんだが、もしかするとただの使いかもしれないので素直に従って着いて行くことにする。

男は無言で、たまに後ろを振り返って俺がちゃんと付いてきているかを確認するという、学校案内あるまじき態度で校内を歩いた。ここはなんていうんですよーみたいなセリフは無いんですか。分かんないです。一応自分で表札を見ながら覚える努力はしているけれども。

今のところ、教室棟らしい俺のいた二階の教室と同じ階にあった渡り廊下を渡って、数学研究室などの研究室の表札のあった別の棟のその階に出て、階段を下りている。生徒用玄関は教室棟にあり、始業式を行ったアリーナはこの棟の一個向こうの一番大きな棟の三階にあったため、このあたりに来るのは初めてだ。

下りきった一階は特別教室が並んでいた。奥へと進みながら見ると、渡り廊下のすぐわきにある階段を手前として、魔工室、生物室、地学室、そして理料研究室と社会資料室が並んでいる。

と、地学室のまで男が足をとめた。そしてへらへらとした笑みを貼り付けたまま、振り返る。

「タツミくん。俺らさ、生徒会じゃないんだよね」

「は？」

生徒会じゃない？なら何だって俺なんか連れてきた。こいつは何を考えてるんだ？

「意味不明って顔だね。じゃあ…教えてあげるよ」

刹那、がらりとドアの開く音がして、腕をひっぱられた。急のことでバランスを崩して倒れこむ。男が魔法で照らしていた明かりが消え、真っ暗な空間に目が効かない。また、がらりと今度は閉まる音がする。地学室に引っぱり込まれたようだ。バランスを崩した体は誰か大きな腕につかまれた。両肩をでっかい掌で掴まれて逃れられない。

「なにすんだ！」

「味見」

さっきの男とは違う声が答える。少しづつ慣れてきた目でも、二人の姿を確認できた。俺をつかんでいる奴も入れて、三人。と、肩を掴んでいた奴の手がするすると腕を伝い始めた。ぞわーっと鳥肌が立つ。

「おい！やめっ——っ」

振り払おうとした腕をぐっと握られて、声が途切れた。そのまま腕を頭上でまとめられる。

なんだよこいつら、もしかして俺リンチ！？なんかしたか、俺！？

「！うぁ・・・」

いきなり背筋をなぞられて変な声が出た。ってか、なんて声出してるの！？俺絶対今混乱してる！

顎に手が触れた感触がして、ピクリと肩が跳ねた。慣れてきた目を凝らすとさっきとは違う男の顔がある。なぜかすぐ近くにあるその顔はどんどん近付いてきて、添えられた手は俺のあごを持ち上げた。

うん？ちよつとまで、これって・・・。

「ギャー！」

俺はとっさに自由な脚で男の急所を一撃し、よろめいた体を更に

回し蹴りでぶっ飛ばした。

ガシャンと音がして、しんと静まり返る。

「…ちよつと、気を失ってるよ。あんたすごいな」

へらへらは、そういうと未だに捕まったままの俺の元に歩み寄り、俺の腹部に両手を押しあてた。

なんだ…？力が抜ける…。魔法、か。しまった。

あてられた掌から全身の力を吸い上げられているような感覚に襲われ、俺はその場に崩れた。掴まれていた手も離される。全身の脱力感と、力の入らない痺れで、立っていることさえまならなかった。

くそつ。これはまずいんじゃないか？

さっきのことで俺はリンチではなく強姦と呼ばれるたぐいなのは、残念ながら分かってしまっている。あれ？強姦って最後までだっけ？つてか最後つて何！？…とりあえずやられるのだけは回避する必要がある。

なのに、魔法とかずるくないか！力、はいんねえじゃん！

「どう？もう立てないでしょ」

へらへらはそういうと、俺のあごをつかんで持ち上げた。既に慣れた目には楽しそうに笑う顔が写る。

「つのやる・・・」

やり返す力がないことを確認してか、にやりと笑うと、にわかに顔を俺の首元に埋めて、舌を這わせだした。

鳥肌の立つような寒気がして、冷汗が背筋を伝う。

やばい、どうしよう。気持ち悪い。嫌だ。

力の入らない腕を無理に動かして頭を押すけれども、力が入らないんじゃない抵抗にもならない。

「やめっ」

ボタンを外され、はだけた前を舌が伝う。ねつとりとして気持ち悪いことこの上ない。後ろにいる男は、俺が倒れないように片手で支えながら、背筋をなぞっていて、ぞわぞわと寒気が襲う。

「うぁ・・・」

やめろ。

嫌だ。

気持ち悪い。

やめて。

おかしくなる。

嫌だ。

怖い。

こわい。

…助けて。

ジワリと涙が滲んだ、その時。

がらりと音がして、光が差し込んだ。

「なにしてる。下校時刻は過ぎているぞ……ほー、お前ら、罰を受ける気はあるな？」

「ふ、風紀委員長・・・」

風紀委員長？って、風紀を乱す奴は許さない役職ですか？

もしかしくつても、助けてくれる。助かった。

俺は心の中で安堵の息を吐きだした。

1 転入ですか。？（後書き）

やってしまった感が・・・

でもやっところというシーンが出せました（笑

誤字脱字等ありましたらお知らせください。

また、感想・評価などもらえると、作者がやる気を出します
↑

1 転入ですか。？――終――

「すまないな。転校初日から」

「いえ…助けていただいてありがとうございました」

あのあと、風紀委員長こと、ダンテ・アルベルさんが襲って来た奴らの生徒手帳を預かって追い返し、俺を魔法で回復してくれた。因みに回復魔法は“媒体魔法”に含まれる高度なものだ。

そして襲われた経緯を話し、学校案内をされる予定で生徒会と約束があると知ると、俺を生徒会室のある特別教室棟（同じ建物）三階の風紀委員室に案内した。落ち着いたら生徒会室に行こうということだった。

生徒会室とは部屋を二、三個挟んだだけの距離だが、そこにはまだ役員が残っているらしい。外はもう真つ暗なのにご苦労なこった。
・・・まあ俺への用事も含まれるんだろうけど。

「・・・」

「・・・」

無言。

風紀委員長のダンテさんは無口な人なんだろうか……。さつきとは別の意味で冷汗流れそうだ。あー、嫌なことを……。

委員長と言うからには先輩なんだろうし、こちらから話しかけるのは何となく憚られる。かといってこの空気は気まずい。

ダンテさんは何かを考えているのか腕を組み、斜め後ろを凝視しながら、俺との間に置かれたガラス製の机に片足のかかとを乗せている。風紀は行儀とか、正す側じゃないんだろうか。

とりあえず、この方も相当美形。つり目と限りなく黒に近いグレイの短髪とそれよりわずかに薄めの瞳。男らしさの感じられる精悍な顔立ちの美形だ。

「タツミと言ったか」

「はい」

長く感じた沈黙を破ったのはダンテさんだった。

ゆるぎないグレーの瞳が俺をとらえる。

「あまり思い出したくないかもしれないけれど、先ほどのことで聞いたことがある」

「・・・はい」

「一人伸びていただろう？ あれは、あいつらでもめたのか？ それとも、お前か？」

ぎくり、と心臓が縮まった気がした。

咄嗟に手（足？）が出てしまったが、今まで面倒なことが嫌だったため表だってあいつた力をふるったことは無いのだ。町の深いところまでは踏み入らないように気をつけていたし、うわさを聞きつけて勝負を挑んで来た奴らには、これ以上広めないようにと釘を刺してきた。俺はあんまり目立つのは好きじゃない。

しかし、なら、こっちではどうだろう。

目立つなどは言われた。だが、魔法もまともに使えない俺にとって、暴力ともいえてしまうこの力は必要ないと言えるだろうか。あつて困ることは無いにしても、それを人に明かす必要はあるだろうか。人に明かして、何か困ることはあるのだろうか。逆にさっきの様な事を起こさせないような、抑制力になってくれはしないだろうか。

ぐちゃぐちゃと憶測が頭の中で飛び交って、ダンテさんが訝しげにこちらを見ているのに気付かなかった。

「どうした？ やはり、思い出したいくないことだったか」

「あ、すみません…あの、どうしてそんなこと聞くんですか？ 実行犯の一人、と言うことではないんですか？」

「それ自体に変わりはない。しっかり処罰する。ただこの質問は今のランキングの結果と合わせての参考だ」

「参考、ですか？」

意外すぎる言葉に、反射的にキーワードを反復した。
一体どういう風に参考になるというのだろうか。

「十中八九、次のランキングにお前は入るだろうからな。もし、あれをやったのがお前だとしたら、風紀に入ってもらおうかと思っただ。だから別に無理して思い出す必要はない。不本意だが、あいつらに聞くこともできるしな」

ランキング云々は、本当にどうして俺がそう言われるのか甚だ疑問なので触れないとして、確かに、あいつらに聞けばごまかしようもないんだと、今気づいた。俺が二度蹴りしたの絶対気づいてるだろうし。あんな暗闇でも。

なら、やっぱりヘタに隠すより全開で行ってしまった方が楽なんじゃないか？

そう結論付けた俺はダンテさんをまっすぐ見据えた。俺の意思をくみ取ったようにダンテさんも俺を見る。

「俺です。一人のしたのは。どうせ確認するなら話さない意味がないので」

俺がそう言うとはやはりか、とつぶやいてダンテさんは口を三日月形に歪めた。にやーという効果音が一番しっくりくるような笑い方だ。俺はと言うと、その笑い方でちよつと冷汗をかいている。

「どうやって？」

「どうつて、蹴つてですが」

「一発？」

「急所を入れて、二発」

「あの暗闇で？」

「…目が慣れていたので」

「ふーん」

なんなんだ！？何がしたい！俺が混乱してきたぞ！

元の世界では俺は目立たない地味なやつで通してたから、ケンカなんて大それたことやってる感じは出ないようにしてたし。体育でさえあんまり得意じゃない感じにしてたから、まあ、実際力は無いんだけどね。テクニクを磨いたから。いろいろ、空手とかの教室に通っていたことも両親しか知らないし。だからこうやって誰かに

こういつた話するのって初めてなんだよね。だって絶対、なんか気づいてますよって顔してるもんこの人。何につて？俺も分かんないあーやばい。ほら混乱してる。ヤバいこと口走らないようにしないと――殺気？

「！？」

バシッ

「ほう……」

咄嗟に左腕で防いだのはダンテさんのキレのある蹴り。受け止めた腕に反動がジンジンと響く。この人本気で蹴ったろ。これ、受け止めなかったら顔面直撃で痣じゃ済まないぞ。

「受け止めたか」

「……だから、なんですか」

にんまりと、先ほどと変わらない笑みを見せながらも、鋭く光る眼光に、睨み返す気持ちで視線を向けた。

この人は一体何がしたいんだ。

「やはり、風紀委員に入ってもらおうかと思ってな」

「……転校生なんですが」

「そんなのは関係ない。様は魔法を使わなくとも相手は無抵抗に出来るだけの力量だ。お前ほどの奴はそういない。幸い、お前は見目がいいからな」

「……見目云々はあなたに言われても嬉しくありませんね。風紀委員と言うのは……魔法を、取り締まるんですか？」

「あたりまえだろう」

しらねえよ。

異世界人なめんな。

あ、ちよつと切れてた。腕まだジンジンするんだよ。あなたの足は平気そうですね。そして美形は平凡にそういうことやめて欲しいね。この際ばこりたくなるから。

ダンテさんは再び腰を落ち着けると、貼り付けていた笑みを崩した。

「そろそろ生徒会室に行くか？」

「あ、はい」

忘れてた。そう言えば学校案内されなくちゃいけないんだった。もうそとは真っ暗だ。あまり遅くなるとイーズが心配するんじゃないだろうか。いや、この腕輪をしてさえいればどこにいるかはわかるし、学校の敷地内なら心配することもないか。

1 転入ですか。？――終――（後書き）

やっと増やせた登場人物・・・

これからどんどん増えます
↑

誤字脱字等ありましたらお知らせを

2 風紀ですか。？（前書き）

お久しぶりです。

やっと生徒会と接触です。

2 風紀ですか？

「入るぞ」

この会の扉はどれも教室のそれとは違い、元の世界で言う洋式のドアになっている。だが、銀のドアノブが着いているようなタイプではなく、少しおしゃれな装飾の施された木製の取っ手だ。

ダンテさんはノックもせずに思いきりドアを開けた。ノックをするという習慣は無いんだろうか。

「風紀委員長。どうしたんで・・・だれです？」

先ほどの風紀委員室の2倍はあるだろう大きな部屋に、執務用だろう机が何個か置かれており、そのひとつに腰かけている、淡い水色の髪の少年が見ていた紙から目を離し、こちらに視線を向けた。柔らかな空気をまとった彼はダンテさんをみて驚き、俺を見て目を細める。

訝しんでいるとみていいかな。ちょっと心外なんだが、まあ、この場所には不釣り合いだろうから気にしない。

さすが生徒会と言ったところか、綺麗な人だ。美形と言うよりは美人だと思う。長い髪の毛はいい感じに跳ねてるし、コバルトブルーの瞳はうつすらと開いていて吸い込まれるような不思議な感覚に陥る。それに何より、色が白い。

ってか俺、こっち来てから人の顔がん見するようになったな。皆きれいなんだよー、しょうが無いよな。うらやましいうらやましい。「転入生だ。生徒会で学校案内をすると聞いたんだが」

「あー、そうだでしたね。さっき、兄さんが迎えに行つて、いなかたつて言つて探しに行つて……まだ戻つてないんですけど？」

「ちよつといろいろあつてな。風紀で預かつてた。サナに連絡取れるか」

「魔法使用の許可をくれるんですたら」

「許す」

机が並んだ横に広く取ったゆとりのあるスペースに、どつしりと置かれた深紅のソファ―にダンテさんは俺の手を引いてぼふっと腰かけた。引きずられて俺も落ちるように座り込む。

良くは分らないが、魔法使用の許可をもらったらしい美人さんは、手のひらの上に楕円形の何かを浮かび上がらせ、それに向かって話しかけていた。

…魔法が無い世界だったら痛い人なんだけど、この世界ではこれもきつと当たり前なんだろうな。さっきの会話の内容から推測するに、彼の兄に連絡を取っているのだろう。あの楕円形の空間は携帯電話の様なものだろうか。素手でやっているところを見るとそれほど高度なものではなさそうだ。

と、美形さんが楕円形を握り消してこちらに柔らかな笑みを向けた。

「すぐ戻って来るそうです。ちょっとキレ気味のようですから、気をつけてください」

「いつもだろう」

いつもキレてるお兄さんなのか。こんなに穏やかな人の兄なのに。兄弟って似ないんだな。

美形さんは絹糸のように柔らかい微笑みを浮かべると、俺を足のつま先から頭のとっぺんまでねめまわした。俺はと言うと、そんな美形さんを凝視している。この人なんか柔らかくって好きだ。ゲームの羊を思い出す。ここで笑った奴、羊のもこもこは神だ！綿だからな！

「僕はイズミ・テラーといいます。タツミ・セガワ君ですね。よろしく願います」

彼は目をすつと細めた素敵なお顔で俺にそう言った。

と、そのほとんど同時。

バン、と酷い音がして両開きの扉が開いた。どうやら彼のお兄さんのご登場のようだ。

眉間に堀の深い皺をいく本も寄せて、イズミさんと同じ色の瞳をこれでもかと言うほどつり上げている。くせつ毛らしい髪は肩の上くらいで踊っていた。

と、彼の焦点が俺に止まり、わずかに見開かれたあと、不機嫌さが増す。

俺なんもしてないですよ。俺個人はなんも悪いことしてないです。

「てめえか、転入生は。ちゃんと待つてられねえのか？あ？」

たんか切られても困る。はつきりいつて俺は悪くない。普通に待つていたかつたさ！すべての責任は変態どもだ！！

平然と顔色一つ変えずに黙っている俺に、お兄さんは再度怒鳴ろうと口を開けかけて、

「来い」

ダンテさんに連れていかれた。

とはいっても部屋の片隅で、こそこそ話しているだけだが。たぶんさっきのことだろう。俺に聞こえないよう話してくれる辺り、あの人は本当に優しい。思い出したくない記憶であることは確かだから。

ほどなくして二人がこちらに戻ってきた。

お兄さんの顔は先程よりはやわらかい。それでもきつめだと言うことは変わらないが。ちなみに彼も美人さんだ。さすが生徒会。

「……すまない」

「へ？」

明らかに自分に向けられた謝罪の言葉に、意味がわからなくて首をかしげる。

「俺がもつと早く向かえば避けられた事態だ」

……それはもつともだ。

確かに変態どもより早く来てくれればあんな目に遭うこともなかった。

ここで今、日本人特有の、かまわないよ、的なニュアンスを持つ

た言葉をはくのは変な誤解をされそうだから言えないし、だからといって攻めるわけにもいかない。でも、黙っているのは失礼だろう。俺はたっぷり二分ほど考えて、口にした。

「俺もそう思います」

俺の発した言葉に驚いているのが伝わる。

やっぱ率直に行っちゃうところいう反応だね。予想は出来た。俺は続ける。

「でも、そんなこと言われても困ります。一番の原因はこんな下らないことを考えたあいつらにあるんですから」

…言い切った。

誰かに自分の意見を伝えるのなんて両親が死んで以来だから、一カ月ぶりくらいか。そんなに長くないな。まあ、学校じゃ皆無だけど。そう考えたら俺すごくない？

なんて冷汗の伝う背中を無視して自分を称賛していると、ダンテさんがにやにやしているのが目に留まる。なんだ。そんなにおかしいか。俺はむすつと顔を歪めた。

「……ああ、わかった。では、取り消そう」

最後の方ではにかんだお兄さんの顔は、眉間のしわはあってもどこことなくイズミさんの笑顔に似ていた。

2 風紀ですか。？（後書き）

誤字脱字等ありましたらお知らせください。

生徒会、とりあえず二人出しました。

どうしてもキャラが典型になってしまいますね。
よくある感じに。

それに表現も似通ったものを使ってしまう……
まだまだです（^^；

感想、評価等頂けると幸いです。

2 風紀ですか。？

「風紀委員？辰巳が？」

既に準備してあった夕食を食べ終わったところ。遅くなった理由を聞かれたので、俺は事の始まりを省いて生徒会とのなんたらかを話した。ダンテさんに誘われたことを伝えと、イーズはあからさまに驚いた。

そんなに驚かなくつても。確かにあなたさまがたのように美形じゃありませんよ。

「そ、なんで俺が……生徒会なんてどうやったって入れないのにね」「いや、そこは問題ないだろうが」

即答でそんなこと言うな。

「目を洗え」

俺も負けじと即答する。

「あれは結構素手でいけないと務まらないだろ。ケン力的なの」

ああ、そこですか。

イーズは食べ終わった皿を重ねながら言った。俺もそれに倣う。あなたの目には俺はきつとか弱いものとして映っているんでしょ。うね。初めて見たのが羞恥プレイの最中だったんだから。しかも俺の言葉……

「無視ですか。……俺結構ケンカしてたから、今日だって……あ」「これ言っちゃまずいだろ。ってか言いそうになった俺何！？もう吹っ切れちゃったの！？まだ恐ろしいものとして根強く残ってるのに。」

一人でビビって固まった俺に、イーズは不審げな表情で顔を覗き込んできた。…近いです。

「何、言おうとした？話しなよ」

「い、いいよ。もう忘れちゃったし」

「嘘」

「わ、忘れたの！」

しどろもどろで答える俺に、イーズは距離を詰める。背中が壁に当たった。

イーズの影が俺に降り注ぐ。妙な雰囲気、背筋が冷えて上が向けない。

ちょっとこういうのはトラウマになりかけてるんだから。

イーズはあんなことしないって分かってるからそんなに怖くないけど。

「わっ！？」

グイッと突然襟を下に引つ張られた。え、下にですか？上で無く？

「ちょ、イーズ！？」

「やっぱり、風紀が出てきたあたりでもしやとは思ったが……いくらなんでも初日だよ」

俺の胸元を凝視して、苦虫を噛み潰したように顔を歪めた彼はどこか色っぽくて、今の俺の状況的にそぐわない感情が俺の中に生れてしまう。ちょっとだけ頬が赤くなったような気がするのは、まあ

……こんなイケメンなんだ。しかたない。

「な、なに」

目線だけを彼に向けながら、恐る恐る聞いてみると、

「キスマーク」

「……は？」

意味不明な答えが返ってきました。

「って、はあ！？」

「って、あの、あれですか？」

「辰巳の言いたい物がなんだかは分からないけど、たぶんそれ」

「ぎいああああああ！！」

なんてこった。なんてこった。

赤く斑点みたくになる奴だろう？

あいつらなんてことしてくれてんだ。力抜けてて気づけなかった。

ああ……

「！わ、ダイジョブか？つてか気づいてなかったのかよ」

「知らなかった……あいつら見つかったらばこる」

壁伝いにずるずるとしゃがみこんだ俺に、イーズはわずかに慌てて自らも俺の目線に合わせた。

「……やっぱ何かあったんだな？なんで話さないんだよ。まあ、思い出したいもんじゃないだろうけど」

「それもあるし、自分から口にして気分のいいもんじゃないだろう……」

床のフローリングをぼんやりと眺めながら言った。

おぼろげでもまだ新しいその記憶は、俺の嫌な部分を刺激する。

気持ちが悪くて無意識に腕を抱きしめた。

「悪い。無理に聞くことじゃなかったな。その様子じゃ最後まではいってないようだし、とりあえずはよかったよ。おおかた風紀委員長に助けてもらったんだろ……。ったく、だから気をつけろって言ったのに……」

聞き捨てならない単語もあったような気がするが気分的にスル―する。ほとんどあつてるし。

「とりあえずっ！この話は終わりにしよう。嫌だ」

「わかった。で、さっき言いかけたの、なんだ？」

言いかけたの？何かあったっけ？

俺が分からないと首をかしげると、結構ケンカしてたっていつてたろ？と俺の上からどいてから言った。

ああ、そう言えばその話から発展したんだった。

「蹴って一人気絶させたら、ダンテさん……風紀委員長が風紀委員はいんないかって言ってきて」

「そういうことか……」

イーズは納得したように腕を組むと、ハア、と大げさにため息をついた。そんな姿も下から見上げる分に色気たっぷりです。

「ちよっと手合わせしてみるか？」

「え？」

「手合わせ。お前がどれだけできるのか。護衛する立場としても興味がある」

俺を見下ろし、好青年は笑った。

「こんなことしていいの？」

「こつちじゃ誰だってしてることだ。異空間だから他の部屋に響かないしな」

俺たちはただ、どこまでもただっ広い異空間にいる。某国民的アニメにあつたような、壁に貼り付けて別の空間を作ってしまう“魔具”、『一空創紙 くうそうし』によって作られた空間だ。白いタイルが敷き詰められた床に、上空には無駄に青い空が張り付いている。本物ではないはずなのだが、どうも本物のように見えてしまふのは“魔具”の性能の高さなのか。

空間の構造は作ったものが都合のいいように変えられるらしい。今の場合は手合わせしやすいように何も無い空間となっている。

イーズはおもむろにはおつていた上着を脱ぐと、薄手のシャツをまくり、俺へと視線を向けた。

やる気ですね……。一国の騎士様だし、俺も久しぶりに全力でやってみるか。

「かかつといで」

「そうする、よっ」

俺は言葉と共に一気に距離を詰めた。体勢を低くして手始めの一発を叩きこむべく右手を握る。

しかし、そんなモノがきまるはずもなく。ひらりとかわされて浮かんだイーズの膝に、咄嗟に体をいなして、腹部をかすった蹴りを見送った。体勢を立て直すため後ろに飛んで一旦距離を取る。

さすが。あの蹴りの速度を前振りもほとんどつけずに繰り出すとは。

だからと言ってやられっぱなしは好かない。勝てるなんて思っちゃいないけど。一発くらいは食らわしてやりたいとは思ってる。そんなくらい希望見たっていいだろ？

俺はもう一度反撃するべく前方に飛んだ。

「はっ、はっ」

「息切れてんな。今日はしまいにすつか？もう結構な時間だ」

イーズは汗で額に張り付いた前髪を、これまた色っぽくかき上げた。

俺も流れ落ちてくる汗をぬぐう。

一時間くらいは経っただろうか。俺はまだイーズに一発も食らわせていない。だが、俺も一発も食らっていない。両者ともぎりぎりまで引き付けてよけるので、至近距離での肉弾戦になりにくい。痛いのは嫌いだから構わないが、イーズの方が何枚か上手のため、とっさの判断として距離を取ってしまうのは毎回俺の方だ。

悔しい気持ちもあるが、また手合わせすればいい。

俺はもう一度流れてきた汗をぬぐうと、頷いて、イーズと共にその空間を後にした。

2 風紀ですか。？（後書き）

いつも通り誤字脱字等ありましたらお知らせください。

戦闘っぽいシーンを書くは好きです^^
なんかスピード感が。

2 風紀ですか。？（前書き）

やっとキャラが増えてきました（^^*）

2 風紀ですか？

サナさんが生徒会室の大扉を開けるとすぐ、俺の前に影が下りた。見上げると、大柄な男がどや顔を浮かべて俺の前に立っていた。見覚えのある顔だ。たしか、始業式で話をしていた、生徒会長。王道学園らしく歓声が上がっていたな。

金に近い黄土色の髪を短くそろえたスポーツ系の美形だろう。きりつとした眼もとに、何やら黒い刺青いれずみが入れていた。この学校刺青まで入れていいんだ。

「……なんか言えよ」

無言で観察していた俺に、じつと見下ろしていた生徒館長は言った。

なんかって言ったって、あなたの方が先輩じゃないですか。でも言えって言うなら言うけどさ。

「では、どいてくれませんか？前が見えません」

「あれ？その声、辰巳？」

生徒会長の後方、生徒会室の中から見知った声を聞き、俺は体をずらした。

「アセラ？あれ？生徒会だったの？」

「うん。学校案内終わったんだね。よかった」

こちらに寄ってきてふわつと微笑んだアセラに、俺も無意識に笑みになっていた。

「俺を無視するな」

「会長なんで辰巳呼んだんです？」

「……会長が呼んだんですか？」

それならそこをどかなくともいいから、早く用件を済ましてほしい。アセラも知らないとは、個人的なものだろうか。

そう思い、俺は生徒会長に向き直った。

そして目に映ったものは――顔。目と鼻の先に生徒会長の顔がある。俺は反射的に身を引こうとして、叶わなかった。

「わっ」

片腕を思いっきりひっぱられ、バランスを崩して近づいたのは吸い込まれるようなブラウンの瞳と刺青。

あれ、このままいつたら――

「ツツ!？」

「でっ!！」

勢いに任せて足を踏んでやったら、生徒会長は変な声を出して上に飛んだ。カエルがカエル。威厳はどこにやら、吹くのを何とかこらえた。変なことしようとすっからだ。

にしても、吃驚した。

「ごめんね。会長少しでも顔がいいとすぐに手を出そうとするから」「アセラが謝ることじゃないよ」

そうか、遊び人ってやつなのか。

そんなに飢えているわけでもあるまいし、なんで俺にしようとするかな。いたって平凡なのに。

「おま、この俺に向かって足を踏むとはっ!」

「あなたが悪いんじゃないですか？用がこれだけなら俺は帰りたいんですが」

「なんだとっ!この俺が直々に呼んでまっ」「デイル、黙って」……」

完全に切れてしまっていた生徒会長を諫めたのは、以外にもイズミさんだった。一発で黙るとかすごいな。生徒会の影の権力者のな？

「辰巳君」

「はい」

呼ばれて顔を向けると、イズミさんは昨日と変わらない柔らかな笑みを浮かべていた。ただそこにつっすら黒いものが見えるのは、気のせいだと思いたい。

「今日呼んだのはそこにいるバカが会いたがっただけです。すいません、そのバカが」

「は、はい」

気のせいではありませんでした。

こえええええ！！

イズミさんこええ！

こんな人だったとは、人は見かけによらないもんだ。うん。
もう背中ピリピリするよ。

完全におとなしくなっている生徒会長がなんだかかわいそうにな
って来た。

「あのー？俺の存在無視ってないかな？イズミちゃん」

いきなり声がして、肩が跳ねるほど大げさに反応してしまった。

声のした左側を見ると、セミロングの赤髪が特徴的かなりの美
形が立っていた。その後ろには背を向けたソファーがあるので今ま
であそこにいたんだと思う。ヘラッと笑って近寄って来る彼は、い
かにもなチャラ男。ちよつと女よりな、でも美人ではなく美形。そ
んなあいまいな表現しかできないが、紛れもなく今までであった誰よ
りもきれいな顔をしていた。

俺はその場で言葉を失った。

この世界美形の頻度高すぎるよ。絶対。

「別に忘れていたわけではありませんよ？あなた寝てたじゃないで
すか」

「だって話に混ざれそうにないんだもん」

彼はわざとらしく口を尖らせて言った。

……なんていうか、きつと自由な人なんだろうな。

何となくそう思っ、そのまま見つめていると、不意に目があっ
た。

ちよつと驚いて体をこわばらせてしまったのがばれたのか、彼は
くすりと笑う。うわー色っぽいなあ。

「辰巳君、だったよね？じゃー、タツみんでいいや。俺はクラウ・
フィシファルってゆーの。同年だからクラウでいいよー」

「……よろしく」

同じ年か。16でこれだけの色気を出すとかもう神の所業だね。

あれ、でもこの世界の神ってだいぶ自分勝手じゃなかったっけ？

「イズミちゃんの言うように今日はもう用事ないから、戻って大丈夫だよ。またねー」

「僕も戻るよ」

なんかいろいろ流されて、俺はアセラに連れられて生徒会室を後にした。

2 風紀ですか。？（後書き）

誤字脱字等ありましたらお知らせください。
また、感想評価など頂けるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0142x/>

神の力の箱ですか。

2011年12月2日22時49分発行